

周作人『老虎橋雜詩』試論（上）

——「雜詩」という形式をめぐる——

小川利康

提要

1934年，周作人“五十自寿诗”由林语堂在“人间世”发表之后，轰动一世，受到上海左翼作家的指责。之后，周作人自己也“鄙人年岁徒增，修养不足，无菩萨投身饲狼之决心，日在戒惧，又恐难免窥伺，更何敢妄作文诗，自蹈覆辙”〈苦茶庵打油诗〉，一直没有作打油诗。虽然周作人的这句话完全是“装傻”的遁词，但他三十年代确实没有写过打油诗。1940年，他却重新开始写打油诗，应该说实在是出于不得已。1945年随着日本无条件投降，周作人被判为“汉奸”，进南京老虎桥监狱，感到“假如用散文或白话诗，便不能说得那么好，或者简直没法子说”，把打油诗易名为“杂诗”，开始大量地写杂诗了。本文初步研究三种版本（即：郑子瑜所藏手稿，吴德铎所藏抄本，谷林所藏抄本）之间的差异，探讨周作人对杂诗持有如何意识与看法。这篇为上篇，下一篇探讨杂诗里的两种形式（即：七言绝句与五言古诗）所带来的差异。

0. はじめに

昨年度，大学派遣の交換研究員として北京大学に一年間滞在した。到着早々，海淀図書館の国風林書店を覗いてみると，刊行間もない『苦雨齋譯叢』

(第二套：六冊)が平積みになっている。早速購入し、大学近くの咖啡館で涼みながらページを繰ると、校訂者止庵とある。研究論文では目にしたことのない名前である。帰宅後、googleで検索すると、止庵の文章だけでなく、関連書評も数多くヒットした。己の無知を愧じつつ幾つか拾い読みして、氏が近年声望の高い散文作家であると知った。更に大学の蔵書目録Webへ飛んで検索してみても、やっと『关于鲁迅』(新疆人民出版社1997年)も止庵の仕事であることに気づいた。他にも『周作人晚期散文选』(湖北人民出版社1994年)や廃名の著作『阿赖耶识论』(辽宁教育出版社2000年)、『废名文集』(东方出版社2000年)も校訂している。廃名の本は先日萬聖書店で買ったばかりである。校訂者の名前など気にもとめていなかった。あわてて止庵の散文集もWebで当当書店に注文する。関心領域が重なるだけに、どんな人物か是非会ってみたい。だが、住所も分からなければ、「単位」も分からない。出版社に手紙を出そうと考えていた矢先、鲁迅博物館の陳漱渝館長にお会いし、思いつきで尋ねてみると、さすがに消息通で、尋ねたその日のうちに連絡が取れ、面会を約すことが出来た。人と知り合うきっかけには、やはり偶然が作用する。

珍しく雨のそぼ降る初夏のある日、バスで遠回りをしたあげく、二時間以上もかかって約束の風入松書店前に現れた氏は予想以上に若々しく、五分に刈り込んだ髪型と黒縁の眼鏡という風貌と相まって大学出たての書獃子といった趣であった。話してみても同世代と分かった気安さか、初対面にもかかわらず、日本ビールと僅かな小皿料理を肴に延々と半日ちかく話しこんだ。話題は周作人から日本文学に至るまであちこちに飛んだが、驚かされたのは該博な知識よりも、周作人への深い傾倒だった。周作人を正しく理解するには、周作人と同レベルの学識が必要であり、自分にはその資格はないという。正論ではあるが、周作人を戦時中対日協力した「漢奸」として批判してきた中国にあって、こうした意見は今でも少数派である。贈られたばかりの『俯仰集』(上海文芸出版社1998年)を開けば、扉には「平日买书第一,读书第二,编书第三,写书第四」

とある。なかば戯言にせも、周作人テキスト校訂は確かに止庵氏の仕事のなかで大きなウェートを占めている。厳格な校訂の仕事はこうしたストイックな姿勢に負うところが大きい。

別れ際、このところ朝から晩まで延々と校訂作業をしているが、まもなく周作人の文集として刊行されると話していた。それが『周作人自編文集』（河北教育出版社刊行、36種）だった。

1. 『周作人自編文集』刊行の意義

2002年1月、止庵⁽¹⁾の校訂になる『周作人自編文集』が刊行された。これまでも1987-88年に岳麓書社から自編文集が刊行され、1995年には文集未収録作品を収める『周作人集外文』が海南国際新聞出版中心より刊行されたほか、1998年には『周作人文類編』⁽²⁾も刊行されており、膨大な作品群もおおむね網羅されていた。だが、対日協力時期の単行本は収録の対象から外されていること、明らかな誤植も一部放置されるなど、決して十分満足の行くものとは言えなかった。

今回の止庵校訂本は初出誌、単行本とを校合のうえ、校訂者の判断で明らかな誤植は正したうえで校訂表を掲げている点、さらに対日協力時期（以下、淪陷期）から解放後に至るまで自編文集全てを網羅している点で、従前版を質量ともに上回る良質のテキストである。今後の周作人研究のうえで必要不可欠なテキストとなるだろう。なかでも注目に値するのが今回初めて公刊された『老虎橋雜詩』で、生前刊行できぬまま終わったテキストである。まず校訂者本人の言葉を借りることにする。

《周作人自編文集》绝大部分均为印本重刊，有两种却是例外，值得一提。一是《老虎桥杂诗》。周氏旧体诗集，从前岳麓书社印行过一种《知堂杂诗抄》，即便删去后人增补部分，仍然无法恢复原貌，与“自编”体例有所不合。谷林著《书边杂写》讲到，六十年代初他曾从周氏借给孙伏园的手订

稿本过录一册，迄今尚存。这次承蒙慨允，因据以排印，收入丛书。此本且较岳麓本多出三十多首，其中有二十首向未发表。纵览周氏著述，反思生平最深切者，莫过于狱中诗作，那么据谷林抄本印行的这部《老虎桥杂诗》，对于读者与研究者应该不无裨益了⁽³⁾。

説明を若干補足すると、岳麓書社版『知堂雜詩抄』（以下、鄭子瑜本）は鄭子瑜によって提供された手写本に基づいて刊行されたものである。この版には淪陷期に書かれた『苦茶庵打油詩』24首、『苦茶庵打油詩補遺』20首に加えて、対日協力の罪を問われて南京老虎橋監獄に収監されていた下獄期（1946—49）に書かれた『老虎橋雜詩』も一部分収められている。だが、淪陷期、下獄期の作品であるがゆえに、生前の周作人も1960年前後の厳しい政治状況下での出版を顧慮して相当数の詩を割愛しており、完全なものではなかった。その後、呉德鐸が鄭子瑜本を補う手写本の存在を明らかにしたものの、やはり不完全なものであった。今回、刊行された手写本は谷林（散文作家）の提供になるもので、従来未見の詩が20首含まれているだけでなく、周作人手稿から直接筆写したものであることからテキストとしての信頼性も高く、刊行の意義は極めて高いと言わねばならない。

周作人が旧詩を書いた時期は大きく二つの時期に分けられる。一つは紹興家居時期、南京求学時期、日本留学時期であり、口語による散文や詩に全く手を染めていなかった時期である⁽⁴⁾。その後、旧詩に再び手を染めるのは1934年の「五十自壽詩」2首からで、当初周作人は打油詩（戯れ歌）、後には雜詩と称して、意識的に口語自由詩、旧詩いずれとも区別した作品を残している。周作人の意識に従えば、確かに旧詩とはいえないが、七言絶句や五言古詩の形式をおおむね踏襲している。この「打油詩」、「雜詩」が最も集中的に書かれたのが、1940年代の淪陷期、下獄期であり、特に下獄期には200首余りも書き残している。周作人の「雜詩」を読み解こうとするならば、下獄期を中心とする作品群を見逃すことは出来ない。また、一部翻訳を除けば、獄中であって唯一残

した作品という意味でも、下獄期の心情をうかがい知る貴重な材料である。

本稿ではようやく全貌を現しつつある周作人の雑詩を検討する作業仮説を立てるため、現時点までに公になったテキスト3種類の比較検討を行い、周作人の雑詩に対する形式意識を明らかにしたい。

2. 淪陥期、下獄期における周作人と雑詩

下獄期の状況については『周作人年譜』（天津人民出版社，2000年4月新版）、『審訊汪偽漢奸筆録』（南京市檔案館編，江蘇古籍出版社1992年）でおおよそが把握できる。日本支配下の北平（北京）において成立した臨時政府下では北京大学文学院院长を，さらに汪兆銘政権下の華北政務委員会では教育総署督弁をつとめた周作人は，日本敗戦後，「漢奸」として戦犯法廷に立たされることになった。その経緯を簡略に記す。

1945年12月 北平炮局胡同監獄へ収監。

1946年5月 南京老虎橋監獄へ移管，忠舎に収監される。

同年6月～9月 南京首都高等法院での公判。

同年11月 最終弁論。

同年 同月 禁固14年，公民権10年剥奪，財産没収の判決を受ける。

12月 最高法院へ上訴。

1947年7月 東獨居（独房）へ移る。

同年12月 禁固10年，公民権10年剥奪，財産没収の判決を受ける。

1949年1月 国民党政府の瓦解により出獄。上海の尤炳圻宅に寄寓する。

8月 北京の尤炳圻宅に2ヶ月滞在した後，自宅へ帰還。

監獄での生活は3年余りにおよび，収監当時すでに齢62歳であった周作人にとって，肉体的にも精神的にも過酷な環境にあったと言わねばならない。そのなかであって雑詩が書かれたのは，精神的な均衡を維持するための安全弁として必要とされたからであろう。また，心情のうえで相当の差異が見られるとは

いえ、これに先立つ淪陥期に相当数の作品を書き残しているのも同様の事情が介在しているためと考えられる。それぞれの作品は時期ごとに周作人自身の手でそれぞれ下記のように分類されている。（*印は生前未発表）

淪陥期：44首（1937-1945）

苦茶庵打油詩24首（七言絶句）（1937-1943）

* 苦茶庵打油詩補遺20首（七言絶句）（1937-1945）

下獄期：236首（1946-1949）

(1)北平炮局胡同监狱（1945年12月-1946年5月）

* 炮局雑詩13首（七言絶句）：46年7月脱稿

(2)南京老虎橋監獄・忠舎（1946年5月-47年7月）

* 忠舎雑詩21首（七言絶句）：46年7月脱稿

* 往昔30首（五言古詩）：47年1月脱稿

* 丙戌歲暮雑詩11首（五言古詩）：47年1月脱稿

(3)南京老虎橋監獄・東獨居（1947年7月-1949年1月）

* 丁亥暑中雑詩32首（五言古詩）：47年8月脱稿

兒童雜事詩 甲乙48首（七言絶句）：47年8月脱稿

兒童雜事詩 丙24首（七言絶句）：48年3月脱稿

出獄前後：59首（1948年-1949年）

* 題畫絶句59首：

「苦茶庵打油詩」,「苦茶庵打油詩補遺」は散発的に書かれているため、執筆期間が長くなっているが、下獄期は折々に比較的集中して書かれ、各章ごとに相当趣きを異にする。その意味で上記の章立ては決して機械的に時期ごとに稿を改めたものではなく、異なるモチーフに基づく作品群と見なければならぬ。さらに形式面でも七言絶句・五言古詩が使い分けられており、この形式の選択が無意識に行われたとは考えにくく、どこまで自覚的であったかは別としても一定の選択意識が働いたと思われる。

以上の作品のうち、ごく一部は生前に雑誌に掲載された⁽⁵⁾ものの、その他の大部分は未発表のまま、周作人は文革の嵐のなかで無惨な死を遂げる。解放後は翻訳に精力を注ぎ、少なくない文章を残しているものの、「漢奸」という汚名のもとでは自由な言論が許されるはずもなく、解放後唯一の自編文集となるはずだった『木片集』は一再ならず刊行計画が頓挫したあげく、最後まで日の目を見ることはなかった。獄中で書かれた詩が同様の命運をたどったのも当然かもしれない。

とはいえ、詩稿もずっと筐底に眠っていたわけではなかった。出獄後も周作人は自らの雑詩を整理校訂し、詩には自注も付して浄書を行っている。また、友人知人から乞われれば、自ら浄書した詩稿を与えていたようで、そうした記述が『周作人年譜』にも散見され、自身でも次のように述べている。

友人達は私にこの種の作品があると知ると、とりわけ些か体を成している二つの作品を（『苦茶庵打油詩』『兒童雜事詩』を指すと思われる：小川）、見せて欲しいと手紙で言ってくるので、その都度手間ひまかけては自分で抄録を作るほかなかった（「知堂雜詩抄序」）⁽⁶⁾

公刊は叶わぬとしても、詩を通して当時の心情を披露したい気持ちは周作人の側にも当然あったはずで、南京、上海で援助を受けた友人、知人から北京の友人達に至るまで相当広い範囲で詩稿は閲覽されていたのではないかと想像される。これが幸いして、周作人自身の手稿すら文革期に失われたものの、多くの手を経て広がった手写本の幾つかは失われずに残ったのである。

3. 逝去後、公刊されたテキストの問題

今日参照可能なテキストは『知堂雜詩抄』、『老虎橋雜詩』のほか、『周作人詩全編箋注』（学林出版社1995年）があり、それぞれ依拠するオリジナルの手稿は異なる。もっとも早く世に出た『知堂雜詩抄』は周作人が1960年前後に鄭子瑜に与えた手稿をもとにしているが、『周作人詩全編箋注』では鄭子瑜本に

加えて、後に公表された呉德鐸（科学技術史研究者）所蔵の手写本も参照し、大幅に収録作品数を増やしている。今回新たに加わった『老虎橋雜詩』は散文作家、谷林所蔵の手写本に依拠しており、収録作品数が違うだけでなく、共通する作品についても文字の異同がある。この異同は単に手写本ゆえの筆誤によるものではなく、恐らく周作人のオリジナル原稿自体が絶えず加筆訂正され、変動していたためと考えられる。それぞれのテキストの成立経過と異同状況を整理しておきたい。

鄭子瑜本

1958年1月以降、周作人は雑詩の出版を提案してきた鄭子瑜宛に詩稿を計2回送っている。当初詩稿は「老虎橋雜詩」と題していたが、2回目に詩稿を送った際、書名を「知堂雜詩抄」に改める旨、鄭子瑜に伝えてきた。「知堂雜詩抄序」（1961年4月）「前序」（1960年1月）の時期から詩稿が送られたの時期は60～61年と考えられる。

1回目に送られた手稿は「往昔」30首、「丙戌丁亥雜詩」30首、「兒童雜事詩」72首と南京時代の作品だけだったが、2回目には「五十自壽詩」2首、「苦茶庵打油詩」24首、「苦茶庵打油詩補遺」20首、「題畫詩」50首、「老虎橋雜詩」13首と、収録対象が広がった。だが、後の呉德鐸本、格林本と比べれば、相当数の作品が削除されていた。このテキストは『知堂雜詩抄』（岳麓書社1987年1月）として日の目を見るまで、結局二十年以上鄭子瑜のもとで死蔵されることになる⁽⁷⁾。

最も信頼性が高いと見られる鄭子瑜本であるが、周作人が当時の政治状況などを顧慮して編んだものであり、必ずしも周作人の思想を十全に反映していない。「炮局雜詩」、「忠舍雜詩」の欠落が端的にその事実を裏付けている。

呉德鐸本

呉德鐸が「“四人帮”最最最最猖獗的年代」⁽⁸⁾に筆写したテキスト。だが、周作人の手稿から直接筆写したのではなく、龍榆生⁽⁹⁾所有手稿を蘇繼庠

（北京大学教授）が筆写し、更に呉德鐸が筆写したものである。このため出所が龍榆生であることが事実ならば、南京下獄時代に成立した最も早いテキストである可能性が高い。その仮定にたてば、「炮局雜詩」、「忠舍雜詩」が欠落しているのは周作人の意図が働いていることになり、当時の周作人が相当慎重であったことを窺わせ、興味深い。

呉は鄭子瑜本との異同箇所を「知堂佚詩一首」「再談知堂雜詩」（『文心雕同』学林出版社1991年11月）で発表し、手写本の存在が明らかになった。『周作人詩全編箋注』では鄭子瑜本との異同を記している。呉によれば、この中に含まれるのは「往昔」30首、「丙戌歲暮雜詩」11首、「丁亥暑中雜詩」32首、「兒童雜事詩」72首のみであるが、鄭子瑜本では削除された作品が多数含まれ、詩のほかにも自注や「雜詩題記」など、鄭子瑜本の不足を補う箇所は少ない。

谷林本

1963年3月頃、周作人が孫伏園に貸与した自筆原稿を手写したもの。当時の事情について、谷林は次のように回想している。

私から周作人の作品には旧体詩一卷があると聞くと、伏老（孫伏園）はただちに貸して欲しいと手紙で使いをやった。ほどなく周豊一（周作人の長男）が届けてきた。そこで私は伏老のために一部、自分のために一部写しを作った。（谷林「曾在我家」1993年11月、『書邊雜寫』辽宁教育出版社1995.3）

このとき、谷林が所蔵していた周作人の著作を孫伏園に貸し、その記念に記した題記に日付が1963年3月29日と残されているため、筆写した時期が特定できるという。これを踏まえるならば、鄭子瑜本よりも新しく、恐らくは周作人の最晩年の手稿本を反映したものと考えられる。また、興味深いのは谷林が人づてに手稿本の存在を聞き知っていたらしいことである⁽¹⁰⁾。当時限られた人々の間では詩稿の存在が知られていたと思われる。

以上の検討からテキストの異同関係をまとめたのが別表である⁽¹¹⁾。表が示すとおり、谷林本は信頼性が高いだけでなく、収録作品数も最も多い。呉德鐸本と谷林本との間には一致点も多いが、自注など細部に異同が残る。筆写の過程で生じた誤記ではなく、おおもとの周作人手稿自体にも時期ごとに異なる版本が存在していたことを示すものであろう。

各テキストの比較			
基準とした版本は太字でしめす ○：一致 △：不一致 ×：欠落			
	呉德鐸本	鄭子瑜本	谷林本
苦茶庵打油詩	×	○	×
苦茶庵打油詩補遺	×	○	×
	呉德鐸本	鄭子瑜本	谷林本
炮局雜詩	×	×	○
忠舎雜詩	×	△	○
往昔	○	○	○
丙戌歲暮雜詩	○	△	○
丁亥暑中雜詩	○	△	○
兒童雜事詩甲	○	○	○
兒童雜事詩乙	○	○	○
兒童雜事詩丙	○	○	○
題畫絕句	×	△	○
爲唐令淵女士題畫	×	○	○

4. 「打油詩」「雜詩」という形式

初めて所謂「打油詩」と称して旧詩を書いた際、周作人は詩の形式を明確に意識していなかった。僅か二首しか書いておらず、当初は発表する意図も持っていなかったのであるから当然とも言える。だが、本格的に「打油詩」に手を染める淪陥期には、旧詩でもなく、口語自由詩でもない第三の型式として明瞭に意識し始めたようだ。

打油詩と称するのは、旧詩と認めるつもりはないと示すため、まして

や詩人などと名乗るつもりもさらさら無く、自分の白話詩にしても新詩だったとは思っていないし、単に別形式の文章でその時の心情を表現したにすぎず、普通の散文と何ら変わらないのだ。（『苦茶庵打油詩』1945年9月）⁴²

「打油詩」が旧詩の範疇に属するものではないと強弁する一方で、五四時期の白話詩の価値も「普通の散文と変わらない」と否定し、当時の自らの詩業を全面的に否定する。確かに1923年を境にして周作人はほとんど口語自由詩を書かなくなっており、淪陥期に「打油詩」と称して書き始めるまでの20年間ものあいだ詩と呼べるものを書いていない。「五十自寿詩」は唯一の例外である。長らく詩を書かなかった要因は、何よりも周作人の内面の変化があろうが、白話詩の可能性に限界を感じたことも一つの要因であった。例えば、その思いを親友である劉半農の詩集の寄せて次のように記している。

中国の文学革命は古典主義（擬古主義ではない）の影響で、全ての作品が皆ガラス玉のように、余りにもキラキラと透き通っていて、些かも臆朧としたところがないため、余韻や後味に欠けている。（『揚鞭集序』1926年5月）

旧詩の難解さ、韻律上の制約の多さを批判して生まれた口語自由詩が口語の持つ明快さを何よりも優先したのは当然であったが、そのために詩がより論理的、散文的な方向へと迷走する結果となったことは否めない。文学史的に見ても、周作人の批判は至極当然のものである。だが、五四時期に口語自由詩を支持し、その書き手として活躍した当事者であった以上、この批判は直ちに自らへと跳ね返ってくる。批判を乗り越えるべき方法論を見だし得なければ、作詩を断念せざるを得なくなるのも至極当然であろう。その意味で、五四退潮期に周作人が提唱した「小詩」という短詞型の口語詩は本来詩が備えるべき特質を取り戻そうとする努力であったといえる。「小詩」という形式は口語自由詩であるものの、日本の短歌俳句の簡潔なスタイルを学ぼうとするもので、周作

人は次のように短詞型の長所を指摘している。

詩歌は本来生き生きと表現することが尊ばれ、あからさまな表現より暗示が重要である。和歌はとても簡潔で表現に含蓄があるが、更に短い俳句に至っては、意図はほとんど言外にあり、説明するのは容易でない（「日本の小詩」1923年6月）

と述べ、中国にも短詞型を取り入れるべきだとして、『忙しい生活の間に心に浮かんでは消えてゆく刹那々々の感じを哀惜する心がある』⁴³ならば、小詩が最良の表現方法だと主張した。後の主張にも繋がる詩の暗示性（余韻、後味）の重視は、この頃すでに現れていたと見る事が出来るだろう。指摘そのものは正鶴を得ており、文学研究会のメンバーの賛同も得て、広く流行した。しかしながら、『湖畔』（湖畔同人）など一部を除き、ほとんどが駄作に終わった。形式をまねることは容易だが、周作人の主張する「暗示」は顧みられなかったためである。このため当時の創造社のメンバーや当時まだ無名だった聞一多らから酷評を浴びている⁴⁴。さりとて当時周作人は韻律詩に立ち戻る気持ちなど持ち合わせていなかった。伝統的詩型について、かつて「私自身旧詩を作れないし、他人が旧詩を作ることに反対する。その理由は旧詩が作るのが難しく、自由に思想を表現できないうえ、月並みの型にはまりやすいからだ」（「倣舊詩」1922年3月）と述べるように、旧詩に対する強い懐疑を捨てきれなかった。このため、白話詩を強く批判し、旧詩の復活を唱えた学衡派に反論して、次のように述べていた。

例えば、無韻詩という問題を論じるにあたり、これまでの韻文の成果、詩経「國風」から小唄に至るまでを参照するならば——民衆文学は多くが新しいものだが、その韻律格調の淵源は極めて古い——中国の文言、口語有韻詩の成果及びその生み出しうる数々の形式を知ることが出来るだろう。その後新しく作られたものは、よしんば思想が少し異なるとしても、韻を用いさえすれば、格調はその範囲から逃れられないのだ。（「古文學」

1922年3月)

韻律の束縛が自由な表現を阻む、旧弊の原因と考えていた以上、内容だけでなく、形式そのものも完全に否定しなければならない。しかし、旧詩を完全に否定し、自由詩である白話詩の前途にも疑問を呈するとなれば、詩作から遠ざかるほかはない。白話詩が散文と何ら異ならないと感じるのであれば、積極的に新たな方法論を模索する必要もない。にもかかわらず、淪陥期に至って少々曲説を押し通してまでも第三の形式として「打油詩」を採用せざるを得なくなったのは、散文では表現しきれない苦衷が新たに生まれ、新たな方法論を見出す必要に駆られたからにはほかならない。下獄期に記した『老虎橋雜詩』では誤解を避けるために「打油詩」の名を改めて「雜詩」と呼ぶと述べ、やや自嘲的にその性格を次のように規定する。

この詩の特色は雑であり、文字が雑で、思想も雑である。第一にこれは旧詩ではないが、些か文字数、脚韻の制約がある。第二に白話詩でもないが、それでも気ままに話す自由はあり、まことに所謂「三脚猫」（中途半端な例え）のようであり、適当な名前がないのだ。（「題記」1947年9月）

このような中途半端な形式であると認めつつも、あえて旧詩の変形を用いるのは、「脚韻の制約がなければ、散文と混同しやすく、少なくとも近いので、結局形式は詩だと言っても効果は散文と変わらない」（「題記」）と述べるように、余りにも簡明すぎる白話詩に限界を感じたからにはほかならなかった。その一方で、かつて韻律を徹底的に忌避していた周作人としては旧詩の世界へと回帰したことを認める気持ちにもなれない。だから、「旧詩に立ち戻って、作りにくいところを壊して」（「題記」）、自分に合わせて「雜詩」として作り替えたと述べているのである。自らも認めるとおり明らかに「削足适履」（足を削って靴に合わせる）であるとしても、周作人にとっては嗜好にあったスタイルであった。

この雜詩は、旧詩はもちろん、白話詩と比べてもずっと書きやすい。

折々の感慨を書きつけたくても、散文には適さない。というのも事柄が余りに簡単なので、気持ちが露わになりすぎるため、文章に書くと全て余すところなく見えてしまい、直截で余韻がないからで、(略)。(「題記」)

「直截で余韻がない」等は凡庸な作詩の一般論とも読める。事実、暗示性を重んじる点では五四時期に提唱した「小詩」が示す理念との類似性は明らかであり、「雑詩」を周作人自身が「俳諧詩」とも言い換えているあたりにも連続性は伺われる。だが、これは一般論ではない。周作人個人が切実に必要とする詩の形式について述べているものであり、たとえば、『歳暮雑詩』の「挑擔」に言及して、次のように述べている。

もしも散文や白話詩を用いたならば、あれほど上手く言えなかったか、全く言いようがない。だが、そこには幾許か「隱曲」(人知れぬ苦衷)があり、ある人は直ちに理解できないかもしれぬが、はっきりと口にすれば、俗になる欠点があるので、あのままあきらめるほかなかったのだ。

(「題記」1947年9月)⁶⁵

では、直截さを避けた「隱曲」を表現する「挑擔」とは、どのような詩か見してみる。

挑擔

我身才中人，宿命應挑擔。照料十方堂，掃地供粥飯。

不必爲結緣，本分事應辦。但願各隨喜，時至自聚散。

何意見白髮，忽而遭按劍。本當共憂喜，十年成敵怨。

虞帝大聖人，福德可讚嘆。吾輩本凡民，所宜安憂患。

忍過事堪喜，此語庶無間。無心學婁公，聊且任唾面。⁶⁶

このなかで周作人の心情を何ううえで最も重要なのは下線部分である。杜牧の詩「遣興」の一節である「事を忍過せば喜ぶに堪える」をたよりに対日協力、そして「漢奸」として裁かれ戦犯法庭など無間地獄のような苦難屈辱にも耐え忍び、婁公を学ぶ気持ちはないものの、今は屈辱に耐えようと締めくくっ

ている。この心情は淪陥期に「讀東山談苑」(1938年)での『『東山談苑』卷七に曰く、倪元鎮が張士信に辱められても、口を閉ざして何も語らなかつた。ある者がそれを問うと、元鎮曰く、話すだけ俗だ(「一説便俗」)という。この言葉は素晴らしい』という周作人の心情に通ずるものがある。対日協力によってもたらされた苦難、そして戦犯法廷での屈辱をあげすげに語る気持ちにはなれない。しかし、全てを黙して語らずにいるのも苦痛である。いわば周作人の雜詩は沈黙の中に封印してきた「一説便俗」の苦衷を伝統的修辭の晦渋さに隠蔽して表現する方法だったといえるだろう。(以下待読)

2002. 7. 15稿

- 注(1) 止庵1959年北京生まれ。周作人の衣鉢を継ぐ散文家。孫郁『文字后的历史(春风文艺出版社2001年)では徐城北、谷林らと並んで「新京派」と称される。周作人の著作校訂でも上記自編文集のほか、『周作人晚期散文选』(湖北人民出版社1994年)、『关于鲁迅』(新疆人民出版社1997年)があるほか、苦雨斋译丛(中国对外翻译出版公司)として第一套:『希腊神话』、『全译伊索寓言』、『财神·希腊拟曲』(1999. 1刊行)、第二套:『古事记』、『枕草子』、『平家物语』、『浮世澡堂』、『浮世理发馆』(2001. 1刊行)もある。この苦雨斋译丛は旧刊人民出版社版によらず、全て周作人手稿を校訂したもので、この叢書の刊行意義も極めて大きい。
- (2) ただし、作品を内容別に分類し直したものであるため、全集や周作人の意図を反映した自編文集とは区別するべきものである。
- (3) 止庵「閑話一二」。電子メールで提供を受けた原稿に基づく。このほか『知堂回想録』も旧来のテキストには多数の誤植があったとして、次のように述べている。「一是《知堂回想録》。此书最早由香港三育图书文具公司出版,以后内地各本,都是依照三育本翻印的。错字实在太多,几乎不能卒读。我很想勘正一番,苦于无所依据,只好作罢。起手校订《知堂回想録》前,作者家属告知原稿尚在,并惠借复印件一份,计目录八页,正文五百五十四页。时为前年盛夏,每天早晨八点我开始工作,除吃中晚饭外,一直干到夜半,整整用时一个月,才告完成。订正三育本错漏字句,有数千处之多」
- (4) この時期の旧詩については村田俊裕による労作がある。村田俊裕「周作人詩話一〜五」(『人文科学論集』21, 24, 26, 31, 33号、信州大学人文学部)は周作人の詩作を詳細に検討、注釈を加えている。現在のところ、1920年代半ばの部分まで検討を進めている。淪陥期、下獄期については木山英雄が『北京苦住庵記』(筑摩書房1978年)で『周作人回想録』で引く雜詩を詳論している。
- (5) 「五十自壽詩」(『現代』1934年1月号掲載)、「苦茶庵打油詩」(『雜誌』1945年10月号掲載、のち「立春以前」1945年8月上海太平書局刊行)。下獄期の作品で唯一発表された「兒童雜事詩甲乙丙」は挿絵を豊子愷が担当して『亦報』1950年2—5月に連載されたのち、香港崇文書局(1973年影印本:未見)が刊行された。更に最近も周作人晩年の浄書手稿(1966年)を用いて、鍾叔河による箋釋本が1991年(文化芸術出版社)、1999年(中華書局)に刊行されている。
- (6) 『知堂雜詩抄』序(岳麓書社1987年刊)

- (7) 鄭子瑜は「論周氏兄弟の雜事詩」（『東京習講録』1963年）で未公開の「苦茶庵打油詩補遺」から一部を引用しているが、出所を明らかにしていなかった。このため『北京苦住庵記』でも「シンガポールの某人」と言及し、関心を寄せている。
- (8) 「知堂佚詩一首」（『文心雕同』学林出版社1991年11月）
- (9) 龍榆生（1902～1966）、名沐助。詞の大家、中央大学教授。朱孝臧（『疆村叢書』編者）に師事。汪精卫政権下で立法委員を務めたかどで蘇州獅子口監獄に下獄。周作人の南京訪問（43年4月）時に龍が南京政府側要員として接待、面識を得た。周豊一の妻・張蕤芳の依頼で周作人が下獄した三年間、龍順宜（長女）らが書物、衣類などを届けていた。龍順宜「知堂老人在南京」（陳子善編『聞話周作人』浙江文藝出版社）
- (10) 例えば、老北大の張中行らとは異なり、谷林は純粹に愛読者として解放後八道湾を二度訪ねているだけで、周作人から直接雜詩の存在を聞いたものとは思われない。
- (11) ただし、詩の収録状況に限っているので、収録作品が共通する箇所でも文字の異同は残っているが、ここでは触れていない。
- (12) 『知堂雜詩抄』序（岳麓書社1987年刊）
- (13) 「論小詩」1922年6月。石川啄木「歌のいろいろ」は日本語原文を参照している。于耀明『周作人と日本近代文学』（翰林書房2001年）第三章「周作人と石川啄木」で詳論されている。
- (14) 拙稿「周作人と清華園の詩人達——「小詩」ブームの波紋」（商学部同校友会『文化論集』二〇号、2002年3月）
- (15) この部分の「題記」は鄭子瑜本では欠落しているため、谷林本を参照している。
- (16) 簡単な注記を掲げておく。前半八句は「五十自寿詩」にも見える前世が和尚だった故事に基づく。遭按劍：暗殺に遭う。1939年の暗殺未遂事件をさす。十年成敵怨：対日協力により国民党政府と対立する立場を取ったことか。虞帝：舜帝のこと。父は弟を愛し、舜を殺そうとしたが、その両親にも孝行で報いた。恨まれても愛情を持って接する博愛主義の比喩か。自らを虞帝、父を政府になぞらえているのか。忍過事堪喜：杜牧の詩「遣興」の句。風流子杜牧の詩を多くの人が杜甫の作と誤解したため、周作人は好んで言及した。無間：無間地獄のこと。呉徳鐸本では「此語度無間」に作る。婁公、唾面：唐代の故事。婁師徳は弟に唾を吐きかけられても拭いてはならぬ、却って反発を買うからと教えた。